特116
702

老松
頼政
井筒
三井寺
天鼓

三

始

特116
702

帝國圖書館藏

大正
10 7. 5
内交

老松　概説　内三巻ノ一

梅津の何某といへる者日頃信ずる北野天神の靈夢に依り筑前太宰府の安樂寺に參詣せり。松閣瓊門神々しく拜まるゝ處に、老人ありて咲き匂ふ梅の花垣を圍へり。言葉をかけて當社の神木飛梅と老松との來歴を聞き、其夜は老松の蔭に旅居して神の告を待ちゐけるに、老松の神現れ出で、歌をうたひ舞をまひ、君が代を松竹鶴亀になぞらへてことほぎけり。

此曲大体ハ抑ヘテ確リメニ謡フベシ高砂ニ比スレバ位開カナレドモ居着クハ悪シ、其ウチニ自ラ緩急アリト知ルベシ
小書　長序ノ傳　返シ留ノ傳

役別		装束附
ワキ	神主梅津何某	大臣烏帽子　紋附腰帯　赤上頭巾　扇　着附厚板　袷狩衣　白大口
ワキツレ二人	従者	大臣烏帽子　紋附腰帯　萌黄上頭巾　扇　着附原板　赤袷狩衣　白大口
前シテ	尉	面小牛尉　緞子腰帯　尉髪　襟浅黄襷　着附小格子　尉扇　茶絓水衣　杉帯　白大口
ツレ	男	直面　襟赤　扇　着附無地熨斗目　浅黄縷水衣　白大口　紋附腰帯
後シテ	老松ノ精	面皺尉　萌黄又ハ茶大口　初冠　白垂　襟浅黄　着附厚板（小格子ニモ）　神扇　袷狩衣

季	正月	曲柄	脇能（初番目）（神祇物）
所	筑前國筑紫郡安樂寺（今ノ太宰府）	稽古順	一級

老松

世阿彌元清作

ワキ神主　ワキツレ二人　真ノ次第上　ツヨク拍子ニ合　サラリ

げに治まれる四方の國。げに治まれる四方の國。關の戸さゝで通はん。

ワキ詞　シツカリ

そもそも是は都の西。梅津の何某とは我が事なり。われ北野を信じ常に歩を運び候所に。或夜の靈夢に。われを信ぜば

筑紫安楽寺に参詣申せとあらたに御霊夢を蒙りて候間只今九州に下向仕り候。

道行三人上

行く事も。心にかなふその時の心にかなふその時の。例も有りや日の本の。国豊かなる秋津洲の。波も音無き四つの海。高麗唐土も残りなき。御調の道のまでにも。安楽寺にも着きにけり安楽寺にも着きにけり

シテ男ツレ姥二人上 真ノセイ 拍子三合ハズ

梅の花笠春も来て。縫ふてふ鳥の。梢かな

松の葉色も時めきて。十かへり深き。緑かな

シテサシ上

風を逐つて潜かに開く年の緑守の松の戸に。春を迎へて忽ち

よ。雲ゐ宮方の末までも。神の恵
に靡くかと。春めき渡る盛かな
歩みを運ぶ宮寺の。光長閑けき
○小謡
春の日に。松も根の名を傳ふ
苔席。名を傳ふ苔席。敷島の
道までもげにありやての山の。
天ぎる雪のふるえをも。なほ惜
まるゝ花盛。手折りやすると守る
梅の。花垣いざやかくてわん梅の花垣
をかこはん。ワキ詞いかにこれなる老人に
尋ね申すべき事の候 シテ 此方の事
にて候か何事にて候ぞ ワキ 聞き及
びたる飛梅とは何れの木を申し
候ぞ ツレ あら事も愚かや我等は

たゞ紅梅殿とこそ崇め申し候へ

ワキ「げにげに紅梅殿とも申すべきぞや。忝くも御詠歌より神木となり給へば。崇めても猶飽き足らずこそ候へ。

シテ「さて此方なる松をば。何とか御覧じ分けられて候ぞ

ワキ「げにげにこれも垣結ひまはし御注連を引き。誠に妙なる神木と見えたり。いかさまこれハ老松の

シテ「畏くも心得給ふものかな。紅梅殿ハ御覧ずらん。是も若木の花守までも。華やかなるに引きかへて

下歌「守るわれさへ老が身の。數古びたるまつ人の。翁さびしき木の

○獨吟
○切迄 雜子

もとも老松と御覧ぜぬ處
もいふおろかや尚々當社の謂
委しく御物語り候へ まづ社壇
の體を眺むれば北に峨々たる
青山あり朧月松閣の中に映
じ南に寥々たる瓊門あり斜日
竹竿のもとに透けり左に火
焔の輪塔あり翠帳紅閨の粧昔
を忘れず右に古寺の舊跡あり
晨鐘夕梵の響絶ゆることなし

クセ 下 拍子ニ合

げにや心なき草木なりと申せども
かゝる浮世の理をば知るべし知る
べし諸木の中に松梅は天神
の御自愛にて紅梅殿も老松も

皆末社と現じ給へり。されバこの
二つの木ハ我が朝よりも猶漢家
にて徳を顕し。唐の帝の御時ハ国に
文学盛んなれバ花の色を増し
匂常より優りたり。文学すた
れバ匂もなく其の色も深からず。
さてこそ文を好む木なりけりと

て梅をバ好文木とハ付けられたれ。
さて松を大夫と云ふ事は。秦の始
皇の御狩の時。天俄かにかき曇り
大雨頻りに降りしかば帝雨を。
凌がんと小松の陰に寄り給ふ。その
松俄かに大木となり。枝を垂れ
葉を並べ木の間すきまを塞ぎ

○小謡

てその雨を漏さゞりしかバ帝大
夫といふ爵を贈り給ひしより
松を大夫と申すなり。かやうに
名高き松梅の花も千代までの。
行く末久にみかきもり。守るべし
守るべしや神はこゝも同じ名の。
天満つ空もくれなゐの。花も松

□古二 神さびて失せにけり あとかみえびて失せにけり

も諸共に。萬代の春とかやみ代
萬代の春とかや。○中入間

□上ゲ歌 三人 待謡

○囃子ヨリモ

嬉しきかなやいざさらば。嬉しき
かなやいざさらば。この松陰に旅居
して風も嘯く寅の時。神の告をも
待ちてみん神の告をも待ちてみん

後シテ老松精 出羽 拍子合ハズ

如何に紅梅殿。今夜の客人をば何

とか慰め給ふべき　げに珍らかよ
春もたち梅も色添ひ　松さへ
もえてぞ老い木の若緑
空澄み渡る神かぐら　歌をうた
ひ舞をまひ　舞楽を供ふる宮寺
の聲も満ちたる有がたや

真之序之舞

○独吟仕舞○

さす枝の　さす枝の梢の若木の
花の袖　これは老い木の神松の
これは老い木の神松の千代に八
千代にさざれ石の巌となりて苔
のむすまで　苔のむすまで松
竹鶴亀の齢を授くるこの君の
行く末護れと我が神託の告を
しらする松風も梅も久しき春

○小謡

てり。めでたけれ。

ノ留

頼政 概説 内三巻ノ二

廻國の僧宇治の里にて老人に會ひ、名所古跡を教へられたる末、導かれて平等院に到りぬ。此所にて老人は扇の芝の由来を語りて聞かせたる後、其身は頼政の亡霊なりとて姿を隠せり。僧は頼政の菩提を弔ひゐたる處に、其霊老武者の姿にて再び現れ、治承の戦を語り或は其様を摸して見せたる末、名残の一首を詠みて扇の芝の蔭に失せけり。

此曲ハ二番目物ノ内ニテモ性立チタル曲ニシテ老人物ノ修羅ナレバヨクヨク心ヲ付ケテ謡フベシ

役別		装束附
ワキ	旅僧	角帽子　着附無地熨斗目　水衣　緞子腰帯　扇　珠数
前シテ	老人	面朝倉尉（又ハ笑尉ニモ）　尉髪　着附無地熨斗目　茶絓水衣　緞子腰帯　襟浅黄　尉扇
後シテ	源頼政	面頼政　頼政頭巾　白茶金襴鉢巻　無色厚板唐織　法被　半切　縫紋腰帯　襟白浅黄　太刀　修羅扇

季	五月	曲柄	二番目（修羅物）
所	山城国久世郡宇治平等院	稽古順	二級

頼政

世阿弥元清作

ワキ僧 これは諸国一見の僧にて候。われこの程は都に候ひて洛陽の寺社残なく拝み廻りて候。これより南都に参らばやと思ひ候

道行上（拍子ニ合 ヨワク） 天雲の。稲荷の社伏し拝み、いなりの社伏し拝み。なほ行く末は

深草や木幡の関を今越えて。伏見の沢田見え渡る。水の上行く宇治の里にも着きにけり。宇治の里にも着きにけり

ワキ カル上 げにや名を得て聞き及びし宇治の里。山の姿川の流。遠の里橋の景色。見所多き名所かな。あれ

れ里人の来り候へかし

シテ詞 なうなう御僧は何事を仰せ候ぞ

ワキ これはこの所始めて一見の者にて候。この宇治の里に於て名所旧跡を御教へ候へ

シテ 処には住み候へども賤しき宇治の里人なれば。名所とも旧跡とも。いさ白浪の宇

治の川よ舟と橋とはありながら。渡り兼ねたる世の中に。住むばかりなる名所旧跡何とか答へ申すべき。いや左様には承り候へども。勧学院の雀は蒙求を囀るといへり。処の人にてましませば御心憎うて。その上まづ喜撰法師が住みける庵

はいづくの程にて候ぞ。されば候ぞとよ。大事の事を御尋ねあれ。喜撰法師が庵は。我が庵は都の巽しかぞ住む。世を宇治山と人はいふなり。人はいふなりとて。主だにも知らし候へ。尉は知らず候。又あれは一村の里の見えて候は。槙の島か

シテ「さん候槇の島とも申し候。又宇治の河島とも申すなり。これに見えたる小島が崎 シテ「名にも橘の小島が崎 向ひに見えたる寺は。恵心の僧都の御法を説きし寺ぞかし シテ「なほなほ旅人あれ御覧ぜよ

〇小謡

名にも似ず月こそ出づれ朝日山月こそ出づれ朝日山。山吹の瀬に影見えて。雪さし下す柴小舟。山も川も朧朧として。是非を分かぬ気色かな。げにや名にし負ふ都に近き宇治の里。聞きしに勝る名所かな。聞きしに勝る名所かな。

シテ「いかに申し候。

この處は平等院と申す御寺の候
もとば謡んぜられて候か　ワキ「不知案内の
事にて候猶よ。まだあんずは御教へ
候へ　シテ「こなたへ御出で候へ。これこそ
平等院にて候へ。又これなるは釣殿
と申して。面白き所にて候よくよく
御覧候へ　ワキ「げにげに面白き所にて候。

又これなる芝をと見れば。扇の如く
取り残されて候は。何と申したる
事にて候ぞ　シテ「さん候この芝につ
いて物語の候語つて聞かせ申し候
べし。昔この處に宮軍のありしに。
源三位頼政合戦に打ち負け給ひ。
この處に扇を敷き自害し果て

給ひぬされば名将の古跡なれば
とて扇の形に取り残して今に扇
の芝とや申し候
痛はしやさしも
文武に名を得し人なれども跡は
草露の道のべとなつて行人征
馬の行への如しあら痛はしや
シテ げによく御弔ひ候ものかなしかも

その宮軍の月も日も今日に当り
て候はいかに
何とその宮軍の月
も日も今日に当りたるとしや
シテ かやうに申せばわれながら余所にては
あらぬ様への言の葉の露の世に
姿見えんと来りたり現とな思ひ
給ひそとよ
夢の浮世の中宿の

夢の浮世の中宿の宇治の橋守年を經て老の波もうち渡す遠方人にもの申すわれ頼政が幽霊と名告もあへず失せにけり名告もあへず失せにけり　中入間

ワキ待謠　さては頼政の幽霊仮に現れわれに詞を交しけるぞや。いざや御跡弔はんと、

上歌　待謠　拍子ニ合　思ひ寄るべの浪枕。思ひ寄るべの波枕。汀も近し此の庭の扇の芝を片敷きて。夢の契りを。待たうよ夢の契りを待たうよ

後シテ頼政上　一声　ツヨク　拍子ニ合ハズ　血は涿鹿の河となつて。紅波楯を流し。白刃骨を碎く。世を宇治川の網代の波。あら閻浮恋しや。伴

物武者の皆緋威の鎧着て宇
治の網代にかゝりけるかなうたかた
のあはれはかなき世の中に
蝸牛の角のあらそひも
はかなかりける心かなあら尊の御事や
尚ゝ御経読み給へ、かぎやお法
體の身にて甲冑を帯し御経読

めし給へる名をさま聞きつる源三
位のその幽霊にてましますか
げにや紅は園生に植ゑても隠れ
なし名告らぬさきに頼政と御覧
ずるこそ恥しけれたゞたゞ御経
読み給へ 御心安く思し召せ五
十展転の功力だに成佛まさるに

シテ上 鏡おしまして、やこれは直道に
用ひおせる法の力、合ひに合ひ
たり處のおも　シテ 平等院の庭の
面、思ひ出でたり　シテ 佛在世に
上 佛の説きし法の場、佛の説きし
法の場、こゝぞ平等大慧の功力に
頼む佛果を得んぞ有難き

○サシ曲独吟
○切迄居囃子

シテ上 今は何をか包むべき。これは三位
頼政、執心の波に浮き沈む因果の
有様現すなり。そもそも治
承の夏の頃、よしなき御謀叛を
勧め申し、名も高倉の宮の内、雲
居のよそに有明の月の都を忍
び出でゝ、シテ中 憂き時しもに近江路や。

三井寺指して、、落ち給ふ。

クセ

さる程に。平家の時も移さず。数萬騎の兵を。関の東に遣すと。聞くや音羽の山続く。山科の里近き木幡の関をよそにて見てぞ。憂き世の様宇治の川橋打ち渡り大和路指して急ぎしに寺と宇治との間

にて。関路の駒の隙もなく。宮は六度まで御落馬にて煩はせ給ひけり。これは前の夜御寝ならざるゆゑなりとて。平等院にして暫く御座を構へつゝ宇治橋の中の間。引き離し下は川波上に立つも。共に白旗を靡して寄する敵を

○獨吟

待ち居たり。さる程に平家の兵(ツハモノ)。宇治川の南の岸に打ち臨み。鬨(トキ)の聲(コヱ)矢叫(ヤサケビ)の音(オト)。波に類(タグ)へて夥(オビタヾ)し。橋の行桁(ユキゲタ)を隔てゝ戦ふ味方には。筒井の浄妙(ジヤウメウ)一来(イチライ)法師(ホウシ)。敵(カタキ)味方(ミカタ)の目を驚(オドロカ)す。かくて平家の大勢(オホゼイ)橋は引いたり水は高し。さすが難所の大河(ダイガ)なれば。左右なふ渡すべきやうもなかりし所に。田原の又太郎忠綱と名告つて宇治川の先陣(センヂン)われなりと名告りもあへず三百余騎(サンビヤクヨキ)。轡(クツバミ)を揃へ川水に少しもためらはず。群れゐる群鳥の翅(ツバサ)を並ぶる羽音もかくやと白波にざつざつとうち入

れて。浮きぬ沈みぬ渡しけり

シテ 中 忠綱兵を。下知して曰く。水の逆巻く所をば。岩ありと知るべし。弱き馬をば下手に立てゝ。強きに水を。防がせよ。流れん武者には弓弭を取らせ。互に力を合すべしと。唯一人の下知によつて。さばかりの大河

なれども一騎も流れず此方の岸にをめいて上がれば味方の勢われながら踏みもためず。半町ばかり。覚えず退つて。切先を揃へて。こゝを最期と戦ふたり。さる程に入り乱れ。われもわれもと戦へば

シテ 上 頼政が頼みつる兄弟の者も

討たれければ。今は何をか期す
べきと 唯一筋に老武者の これ
までと思ひて これまでと思ひて
平等院の庭の面。これなる芝の上
に。扇をうち敷き鎧脱ぎ捨て座
を組みて。刀を抜きながらさすがに
名を得しその身とて 埋木の。

花咲く事もなかりしに。身のなる
果ては哀れなりけり。あと弔ひ給へ
御僧よ。かりそめながらこれとても
他生の種の縁に今。扇の芝の草
の陰に。帰るとて失せにけり。立
ち帰るとて失せにけり。

井筒　概説　内三巻ノ三

廻國の僧大和國石ノ上なる在原寺に立寄りたるに、女性ありて塚に手向をなせるより仔細を問へば、此寺の本願在原業平の跡のしるしは此塚と聞くがまゝに弔ひまゐらするなりとの事に、塚のあたりを見れば一叢薄の穂に出でたるが立てるのみなりけり。女は業平が紀有常の女と契りし事など委しく語りたる後、其身は有常の女なりとて井筒の影に隠れぬ。夜も更けし頃、此女、業平が有りし世の姿に扮して現れ、歌ひ舞ひ、井筒に寄り添ひては古を忍ぶ氣色なりしが、いつとなく消え失するを見て僧の夢は覺めけり。

此曲極閑カニシテ優ニ謡ヒ其内ニ自ラ緩急アルベシ

小書　物着　彩色傳

役別		装束附
ワキ	旅僧	角帽子　着附無地熨斗目　水衣　緞子腰帯　扇 珠數
前シテ	里女	面若女　鬘　鬘帯　着附箔　唐織着流　襟白 木ノ葉
後シテ	紀有常ノ女 井筒姫	面若女　初冠　懸纓追掛　着附摺箔　紫長絹　縫箔腰巻 胴箔腰帯　襟白　葛扇

季	九月	曲柄	三番目 鬘物		
所	大和國山辺郡丹波市町 石上在原寺	稽古順	二級		

井筒

世阿彌元清作

ワキ僧詞　閑カニ

これは諸國一見の僧にて候。われこの程は南都七堂に參りて候。又これより初瀬に參らばやと存じ候。これなる寺を人に尋ねて候へば。在原寺とかや申し候。立ち寄り一見せばやと思ひ候。

ヨワク　カル上　沈ヲカヘ閑カニ　拍子ニ合ズ

さては

この在原寺にいにしへ業平紀の有
常の息女夫婦住み給ひし石の
上なるべし。風吹けば沖つ白浪龍
田山と詠じけんも。この處にての
事なるべし。昔語の跡訪へば。
その業平の友とせし紀の有常
の常なき世。妹背をかけて。弔

シテ女 次オテ上

はん妹背をかけて弔はん
暁毎の閼伽の水。暁毎の閼伽の水。
月も心やすますらん

サシ上

さなきだに物の淋しき秋の夜の。人目稀
なる古寺の。庭の松風更け過ぎ
て月も傾く軒端の草。忘れて過
ぎし古を。忍ぶ顔にていつまでか待

つ事なくてながらへんげに何事も思ひ出の人には殘る世の中かな

下歌　拍子ニ合

たゞいつとなく一筋に賴む佛の御手の糸導き給へ法の聲

上歌

○迷ひをも照らさせ給ふ御誓ひ照らさせ給ふ御誓ひげにもと見えて有明の行方は西の山なれど眺めは四方の秋の空

○小謡

松の聲のみ聞ゆれども嵐はいづくとも定めなき世の夢心何の音にか覺めてまし何の音にか覺めてまし。われこの寺に休らひ心を澄ます折節いとなまめける女性庭の板井を掬びあげ花水とし是なる塚に回向の氣色見え

給ふは。いかなる人にてましますぞ

シテ「これは此あたりに住む者なり。さても此寺の本願在原の業平は。世に名をとめし人なり。されば其跡の證もこれなる塚の陰やらん。わらはも委しくは知らず候へども。花水を手向け御跡を弔ひまゐらせ候

ワキ「げにげに業平の御事は。世に名をとめし人なり。さりながら今は遥かに遠き世の。昔語りの跡なるを。志も女性の御身として。かやうに弔ひ給ふ事。その在原の業平にいかさま故ある御身やらん

シテ「故ある身かと問はせ給ふ。

その業平はその時だにも昔男と
いはれし身の。ましてや今は遠き
世に。故もゆかりもあるべからず
ワキカヽル上ゲテ もつとも仰はさる事なれども。こゝは
昔の旧跡にて。シテ 主こそ遠く業
平の。ワキ 跡は残りてさすがにい
まだ。シテ 聞えは朽ちぬ世語を

○小謡

ワキ 語れば今も。シテ 昔男の。上歌 地 名ばかり
は。在原寺の跡古りて。在原寺の
跡古りて。松も老いたる塚の草。
これこそそれよ亡き跡の。一村す
ゝきの穂に出づるはいつの名残なる
らん。草茫々として露深々と古
塚の。真なるかな古の。跡なつかし

き聲もかおお弦あつかましき業ぞとよ。

ワキ なほなほ業平の御事委しく御物語り候へ

クリ 地上 昔在原の中將。年經てこゝに石の上。古りにし里も花の春。月の秋とて住み給ひしに

○サシ 曲独吟

シテ その頃は紀の有常が娘と契り。妹背の心淺からざりしに。

シテ中 河内の國高安の里に知る人ありて二道に忍びて通ひ給ひしに

シテ中 風吹けば沖つ白波龍田山。夜半にや君がひとり行くらんとおぼつかなみの夜の道。行方を思ふ心とげてよその契りはかれがれなり

シテ中 げに情知るうたかたの哀をのべ

しも理あり。昔この国に住む人の有りけるが。宿を並べて門の前。井筒に寄りてうなゐ子の。友だち語らひて互に影を水鏡。面を並べ袖をかけ。心の水も底ひなく。移る月日も重なりて。おとなしく恥ぢがはしく互に今はなりにけり。

その後かのまめ男。言葉の露の玉章の。心の花も色添ひて。

シテ上 筒井筒。井筒にかけしまろがたけ。生ひにけらしな。妹見ざる間にと。詠みて贈りける程に。その時女も。くらべこし振分髪も肩過ぎぬ。君ならずして。誰かあぐべきと互に

とよみし故なれや。筒井筒の女
とも聞えしハ有常が娘の古き
名なるべし。げにやふりにし物語。
聞けば妙なる有様の。あやしや名
告りおはしませ 真ハわれは恋
衣。紀の有常が娘とも。いさ白波の
龍田山夜半に紛れて来りたり

ふしぎや。さては龍田山。色にぞ出づ
るもみぢ葉の 紀の有常が娘
とも 又ハ井筒の女とも 恥かし
ながらわれなりと。いふや注連縄の
ながき夜をちぎりし年ハつゝ井
づ。井筒の陰に隠れけり 井
筒の陰に隠れけり

中入間

ワキ上歌 待謡 ○切返 拍子

更け行くや。在原寺のよるの月。在原寺の夜の月。昔をかへす衣手に夢待ちそへて仮枕。苔の筵に。臥しにけり苔の筵に臥しにけり

後シテ女上 一声

あだなりと名にこそ立てれ桜花。年に稀なる人も待ちけり。かやうに詠みしもわれなれば。人待つ女ともいはれしなり。われ筒井筒の昔より真弓槻弓年を経て。今は亡き世に業平の。形見の直衣。身に触れて恥かしや。昔男に移り舞。

地 雪を廻らす。花の袖

序之舞

シテワカ上

○ここに来て。昔ぞ返す。在原の

○独吟

地上

寺井に澄める月ぞさやけき。月

○仕舞

ぞさやけき月やあらぬ。春や昔と詠めしも。いつの頃ぞや。筒井筒。つゝ井筒。井筒にかけし

シテ まろがたけ

地 生ひにけらしな

シテ 老いにけるぞや

地 さながら見みえし昔男の。冠直衣は。女とも見えず。男なりけり。業平の面影

シテ 見れば

なつかしや。われながらなつかしや。亡婦魄霊の姿は。しぼめる花の。色無うて匂。残りて在原の寺の鐘もほのぼのと。明くれば古寺の松風や芭蕉葉の夢も。破れて覚めにけり夢は。破れ明けにけり。

三井寺　概説　内三巻ノ四

駿河國清見が関の女、京都清水寺の観世音の霊夢にまかせ、人商人に誘拐されし一子千満を尋ねて三井寺に赴けば、折から八月十五夜の月の眺め面白く、鐘の音聞え來にけるにぞ、我も成佛の縁を得んと撞き出せば、偶月見に來り居たる住僧、狂人と見て鐘樓を出でよと叱咤す。女は唐土の聖人すら月には心亂れて鐘撞きし事あり、まして狂人の身なれば許したまへとて鐘に縁ある事ども語る。さるほどに住僧の伴ひし一童子此女の故郷を訊ねて其身の母なる事を知り、名乘あひて鐘ゆゑに再會せしを喜び打連れ歸りけるが、此子孝心深く遂には富貴の家となりけり。

此曲サラ／＼トノミ謡ハズ佯リノ狂女ナレバ其心シテ謡フベシ

小書 無俳之傳

役別		装束附
シテ	千満ノ母	面深井 鬘 鬘帯 着附摺箔 無色唐織着流 襟浅黄 珠数
子方	稚児千満	直面 着附縫箔 児袴 縫入腰帯 襟赤 扇
ワキ	三井寺住僧	角帽子 着附小格子 水衣 白大口 縫紋腰帯 珠数 扇
ワキツレ二三人	従僧	角帽子 着附無地熨斗目 縷水衣 白大口 縫紋腰帯 珠数 扇
後シテ	狂女(千満ノ母)	面深井 鬘 鬘帯 着附摺箔 水衣 無色腰巻 縫入腰帯 襟浅黄 扇 笹

季	八月	曲柄	四番目 (狂女物)
所	前 京都洛東清水寺 後 近江國滋賀郡大津三井寺	稽古順	二級

三井寺

世阿彌元清作

シテ女サシ上 閑ニ重クチラヌ様

ヨワク 拍子不合ハズ

南無や大慈大悲の観世音さしも草さしもかしこき誓の末。一称一念なほ頼みあり。ましてやこの程日を送り。夜を重ねたる歩の末。などかそのかひなからんと思ふ心ぞ哀なる

拍子ニ合 下ゲ奇 気ヲカヘ

憐み給へ思ひ

子の行く末何となりぬらん行く
末何となりぬらん　上　枯れたる木
またにも枯れたる木にだにも花
咲くべくはわれのつから未だ若木の
みどり子に二度などか逢はざらん
二度などか逢はざらん　シテ　あら有難
やがて少し睡眠のうちにあらたなる

霊夢を蒙りて候いかにわらは
べといつも訪ひ慰むる人の候あはれ
あり候へかし語らばやと思ひ候　狂言
シテ　只今少し睡眠のうちにあらた
なる霊夢を蒙りて候程に我が子に
逢はんと思はゞ三井寺へ参れとあら
たなる霊夢を蒙りて候　狂言　シテ　あら嬉

しと御あはせ候ものかな。告に任せて三井寺とやらんへまいり候べし　中入

ワキ僧　ワキツレ三人　次第上　ツヨク　拍子ニ合

秋も半のくれ待ちて。秋も半のくれ待ちて。月に心や急ぐらん

ワキ詞

これは江州園城寺の住僧にて候。又これにわたり候稚き人は。愚僧を頼む由仰せ候間。力なく師弟の契約をなして候。又今夜は八月十五夜明月にて候程に稚き人を伴ひ申し。皆々講堂の庭に出でて月を眺めばやと存じ候

上歌　四人

頼みある。名も望月の今宵とて。名も望月の今宵とて。夕べを急ぐ人心。知るも知らぬも諸共に。

雲と厭ふやかねてより、月の名頼む日影かな、月の名頼む日影かな

後シテ狂女上 一声 拍子ニ合ハズ

雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪と詠じけん、志賀の山越うち過ぎて、眺めの末は湖の、鳰照る比叡の山高み、上見ぬ鷲の御山とやらんも、今目の前に拝む事よ、あら有難の御事や、かやうに心あり顔なれども、われは物に狂ふよなう、いやわれながら理なり、あの鳥類や畜類だにも、親子の哀れを知るぞかし、ましてや人の親として、いとほし悲しと育てつる

一セイ上

子の行方をも白糸の、乱れ心や

上 狂ふらん

翔

シテ 都の秋を捨てゝ行かば

○小謡 月見ぬ里に住みやならへるとさて

その人の笑めよし花も紅葉も

月も雪も古郷に我が子のある

ならば田舎も住みよかるべしいざ

古郷に帰らんいざ古郷に帰らん。

帰れべきさゝ波や志賀辛崎の一つ

松。みどり子の類あらば松風に言

問はん松風も。今は厭はじ桜咲く

春ならば花園の里をも早くすぎ

間吹く風すさましき秋の水の。

三井寺に着きにけり三井寺に。

早く着きにけり。桂はみのる

三五の暮。名高き月にあこがれて。

○小謡

庭の木陰に休らへば。げに今宵は三五夜中の新月の色。二千里の外の故人の心。水の面に照る月なみと数ふれば。秋も最中夜もなかば。所からさへ面白や。月は山風ぞ時雨に鳰の海。風ぞ時雨に鳰の海。波も粟津の森見えて。

海越しの遠に白みて影なれど月はますみの鏡山。山田矢橋の渡し舟の夜は通ふ人なくとも。月の誘はゞおのづから舟もこがれて出づらん舟人もこがれ出づらん。面白の鐘の音やな。我が故郷にての清見寺の鐘をこそ常は聞き馴れしに。

これはさゞ波や。三井の古寺鐘
はあれど昔に帰る聲は聞えず。
眞や此の鐘は秀郷とやらんの
龍宮より取りて帰りし鐘なれ
ば龍女が成佛の縁に任せて我等
も鐘を撞くべきなり。影はさな
がら霜夜にて影はさながら霜夜

にて月にや鐘は冴えぬらんやあ
やあ暫く狂人の身にて何とて鐘
をば撞くぞ急いでのき候へ夜夜
公が楼に登りしも月に詠ぜし鐘
の音なりゆるさしめそれは心ある
故人の詞狂人の身として鐘撞く
べき事思ひもよらぬ事にてあるぞ

ことに今宵の月に鐘撞く事。狂
人こそ厭ひ給ひつれ或詩に曰く。
團々として海嶠を離れ漸々として
雲衢を出づ。此の後句なかりしかバ。
明月に向つて心を澄まいて今宵
一輪満てり。清光何れの所にか
無からんと。この句をまうけて餘り

鐘ノ段
○独吟ハ仕舞

の嬉しさに心乱れ。高楼に登つて
鐘を撞く。人いかにと咎めしに。これ
ハ詩狂と答ふ。かゝる聖人なりし
だに。月に乱るゝ心あり。まして
や拙き狂女なれバ。許し給へや
人々よ。煩悩の夢を覚ますや。法の
聲も静かにまづ初夜の鐘を撞く

シテ 時は　諸行無常と響くなり
地上 後夜の鐘を撞く時は　是生滅
法と響くなり　地 晨朝の響は
シテ 生滅滅已　地 入相は　シテ 寂滅為楽
と響きて菩提の道の鐘の聲。
月も数添ひて。百八煩悩の眠りの。
驚く夢の世の迷ひも。はや尽きたり

○サシ

や後夜の鐘にわれも五障の雲
晴れて。真如の月の影を眺め居
りて明かさん。それ長楽の鐘の
聲は花の外に尽きぬ。又龍池の
柳の色は雨の中に深し。其の外
こゝも世の人言葉の林のかね
て聞くも高砂の尾上の鐘。

暁かけて秋の霜。曇るか月もこもりくの初瀬も遠し難波寺。名所多き。鐘の音尽きぬや法の聲ならん。

クセ 拍子合

山寺の春の夕暮来て見れば入相の鐘に。花ぞ散りける。げに惜しめども。など夢の春と暮れぬらん。その外暁の。別れを惜しむきぬぎぬの。恨みをそふる行方にも。枕の鐘や響くらん。又待つ宵に更け行く鐘の聲聞けば。あかぬ別れの鳥はものかはと詠ぜしも。恋路の便の音信の聲と聞くものを。老いらくの。寝覚程経る古を。今思ひ寝の夢だにも。涙心の淋しきに。この鐘のつく

づくし思ひを盡す、曉もいつの時よ
かくらべまし、月落ち鳥啼いて、
霜天に滿ちて冷しく江村の漁火
も仄かに半夜の鐘の響は客の
船にや通ふらん蓬窓雨滴りて
馴れし汐路の楫枕浮き寝ぞ變
る此の海は波風も靜にて秋の
夜すがら月澄む三井寺の。鐘
ぞさやけき。いかに申すべき事の
候。何事にて候ぞ。これなる物狂の
國里を問うて給はり候へ。これの
思ひもよらぬ事を承り候ものかな。
さりながら易き間の事尋ねて
參らせうずるにて候。いかにこれなる

狂女。おことの国里はいづくの者にて
あるぞ　シテ これは駿河の国清見が
関の者にて候　子 何清見が関
の者と申すか　シテ あら不思議や。今
の物仰せられつるは。正しく我が子
の千満殿ござめれあら珍らしやな
ワキ 暫く これなる狂女は麁忽なる事
とや申すものかな。さればこそ物狂にては候
シテカヽル あうこれは物に狂はぬものを。物
狂ふも別故。逢ふ時は何しに狂ひ
候べき。これは正しき我が子にて候
ワキツレ僧 さればこそ我が子と申すか條な
き事とやし作。急いでのき候へ
子 あら悲しやさのみな御打ち候ひそ

ワキ「言語道断。やさしく出で給ひて候。この上はまつすぐに御名告り候へ。

子「今は何をか包むべき。われは駿河の國。清見が關の者なりしが。人商人の手に渡り。今この寺にありながら。母上われを尋ね給ひて。かやうに狂ひ出で給ふも。我子もわれは知らぬなり。

シテ「またわらはも物に狂ふこと。あの兒に別れし故なれば。適逢ひみる嬉しさのまゝ。頓て母よと名告る事。我が子の面ぶせなれど子故に迷ふ親の身は。恥も人目も思はれず。「あら痛はしの御事や。餘所目も時によるものを逢ふを

恃びあるべし。嬉しながらも
衰ふる。姿ぞさすがはづかしのもり
て餘れる涙かな　地上 げに逢ひ難き
親と子の。縁は盡きせぬ契とて
シテ 月こそ多きに今宵しも　地 此の
三井寺に廻り來て　シテ 親子に逢ふは
地 何故ぞ。この鐘の聲立てゝ物狂の

あるぞとて。咎めありし。故あれ
ば。常の契は。ふわの鐘と厭ひしに。
親子のための契は。鐘故に逢ふ
夜あり。嬉しき。鐘の聲かな　キリ かく
て伴ひたち歸り。かくて伴ひたち
歸り。親子の契り盡きせずも。富貴
の家となりにけり。げに有難き

孝行の威徳ぞめでたかりける
威徳ぞめでたかりける

天鼓　概説　内三巻ノ五

昔唐土後漢の世に王伯王母といへる夫婦ありけり。一夜天より鼓降り王母の胎内に宿ると見て一人の子を産みければ、其名を天鼓と名づけしに、其後天より鼓降りけるにぞ天鼓之を秘藏しけり。帝此由を聞き、其鼓を召しに、天鼓深く惜みて山中に隱れしかば、帝之を探し出し、天鼓を呂水に沈め、鼓を内裏に收めけり。然るに此鼓打てども更に鳴る事無し。乃ち王伯を召して打たせけるに不思議にも音を發しければ、帝あはれと思召し、呂水のほとりに臨幸あり、天鼓の跡を篤く弔ひけるに、天鼓の靈現れて舞樂を奏し、悦びて歸りけり。

此曲前ハ調子抑ヘメニ閑カニ謡ヒ後ハサラリト朗カニ謡フヲ宜シトス
小書　弄鼓ノ楽

役附		装束附
ワキ	勅使	着附厚板　側次　大口　紋附腰帯　扇
前シテ	老翁王伯	面阿古父尉（又ハ小牛尉）　尉髪　着附小格子　茶水衣　緞子腰帯　襟浅黄　扇
後シテ	天鼓	面慈童（又ハ童子）　黒頭　黒鉢巻　着附厚板唐織　法被　半切　紋附腰帯　襟白　唐團扇

季	七月	所	唐土
曲柄	四番目	稽古順	三級

天鼓（テンコ）

世阿彌元清作

ワキ勅使〔閑カニ〕これハ唐土後漢（モロコシゴカン）の帝（ミカド）に仕（ツカ）へ奉る臣下なり。さても其國の傍（カタハラ）に王伯王母（ハクワウボ）とて夫婦（フウフ）の者あり。彼（カ）の者一人（イチニン）の子を持つ。その名を天鼓と名づく。かれを天鼓と名付（ナヅ）くる事ハ。かれが母夢中（ムチウ）に天より一（ヒト）つの

鼓降りくだり胎内に宿るとみて
出生したる子なれバとてその名
を天鼓と名づく。その後天より
真の鼓ふりくだり。打てバその
声妙にして聞く人感を催せり。
その由帝聞し召され。鼓を内裏
に召されしに。天鼓深く惜み。鼓を

抱きて山中に隠れぬ。なれどもいづく
か王地ならねバ。官人を以て捜し出
だし。天鼓をバ呂水の江に沈め。鼓
をバ内裏に召され。阿房殿雲龍閣
に据ゑ置かれしに。その後の鼓
を打たせらるれども更に鳴る事
なし。いかさま主の別れを歎き鳴らぬ

し思し召す間。彼の者の父王伯を召して打たせよとの宣旨に任せ。今王伯が私宅へと急ぎ候

シテ一セイ
露の世に。なほ老の身のいつまでか。又この秋に残るらん　傳へ聞く孔子は鯉魚に別れて。思ひの火を胸に焚き。白居易は子を先だてゝ。枕に残る薬を恨む。これ皆仁義禮智信の祖師。文道の大祖たり。我等が歎くは愚かならじと。思ふ思ひに堪へかぬる。涙いとなき孩かな

下歌
思ひしと思ふ心のほどやらん。夢にもあらで現にも。なき子の中々に。悲しきなき子の中々に悲しき。よし

○小謡

さらば思ひ出でじと思ひ寝の。思ひ出でじと思ひ寝の。夢の現に生れきて。忘れんと思ふ心こそ。忘れぬよりは思ひなれ。たゞ何故のうき身の命のみこそ恨なれ命のみこそ恨なれ。

ワキ「いかにこの屋の内に王伯があるか

シテ「誰にて渡り候ぞ

ワキ「これは帝よりの宣旨にてあるぞ

シテ「宣旨とはあら思ひよらずや何事にて候ぞ

ワキ「さても天鼓が鼓内裏に召されて後。いろいろ打たせらるれども更に鳴る事なし。いかさま主の別れを歎き鳴らぬと思し召さるゝ間。王伯に参りて仕れとの宣旨にてある

ず急いで參内仕り候へ　シテ〽畏つて承り候ふさりながら勅命にだに鳴らぬ鼓の。老人が參りて打ちたればとて。何しに聲の出づべきぞ。いやいやこれも心得たり。勅命を背きし者の父なれば。重ねて失はれんためにてぞあるらん。よしよしそれも力なし。我が子のために失はれんは。それこそ老の望なれ。あら歎くまじや。頓て參り候べし〽いやいやさやうの宣旨ならば。たゞたゞ鼓を打たせん其のためばかりの勅諚なり。急いで參り給ふべし

シテ上音〽たとひ罪には沈むとも。たとひ罪

身は沈むとも又は罪も沈まじ
こもうきながら我が子の形見に帝
を拝み参らせん帝を拝み参ら
せん　急いで宮殿なく内裏にてある
ぞ此方へ来り候へ　勅使にて候ふ程に
是迄は参りて候へども老人が事
をば御免あるべく候　申す所は理

あれども先づ鼓を仕りて鳴らさぬは
力なき事急いで仕り候へ　さては
辞すとも叶ふまじ　勅に応じて打
つ鼓の声も出でばそれこそは
我が子の形見と思ふ月の夜に輝く
玉殿に始めて臨む老の身の
地次第上
生きてある身は久方の生きてある

身は久方の。天の鼓を打たうよ

クリ上 その積礫にあらつて。玉淵を窺ハざるハ。驪龍の蟠る所を知らざるなり

○サシ曲独吟 げにや世々毎の親子よ生まれきて。愛別離苦の思ひ深く恨むまじき人をと恨み。悲しむまじき身をと歎きて。われと心の闇深く。輪廻の波に漂ふ事。生々世々もいつまでの思ひのきづな。ながき世の苦みの海に沈むと

クセ下 かやうに地を走る獣。空を翔る翅。までも親子の気知らざるや。況んや佛性。同體の人。況の生よ。その身を浮へずいつの時か生死の海をと

渡り川を越えて彼岸に至るべき
親子は三界の首枷と聞けば誠に
老いぼれの涙の雨の独り残れる
増る事衰身と恨みても其のかひ
のなき世に沈む罪科は命あれ
や明暮の鼓の現にも思はれぬ
身こそ恨みなれ 鼓の時も移る

あら涙を止めて老人よ急いで
鼓打つべし げにげにこれは大君の
恐しや勅命の老の時もうつるなり
急いで鼓打たうよ 打つや打たず
や老波の立ち寄る影も夕月の
雲龍閣の光さす 玉の階
玉の床に 老の歩みも足弱く薄氷

を踏む如くにて心もあやなきその
鼓打てばふしぎやその聲の心耳
を澄まし聲出でゝげにも親子
の證の聲。君も哀れと思しめして
龍顔に御涙を浮べ給ふぞ有難き

ワキ詞 如何に老人只今鼓の音の出でたる
事。叡感に思しめさるゝ間。老人
に數の寶を下さるゝなり。又天
鼓が跡をば管絃講にて御弔ひあ
るべきとの勅諚なり。心安くなじ。
まづまづ老人は私宅に帰り候へ

シテ あら有難やさらば老人は私宅
に帰り候べし

中入間

ワキカヽル上 さても天鼓
が跡を弔はんと。呂水の堤に御幸

上哥 待謡 拍子三合

あつて。同じく天の。鼓を据ゑ

糸竹呂律の聲々に。糸竹呂律

の聲々に。法事をなして亡き跡

を。御弔ひ有難き。頃は初秋の

空なればや三伏の夏たけ。風一

聲の秋の空夕月の色も照り

そひて。水滔々として波悠々たり

後シテ天鼓霊出ル
一声

あら有難の御弔ひやな。勅を背き

し天罰にて。呂水に沈みし身なり

あれば。かほどの世までも苦みの海に

沈み浪に打たれて。呵責の責も

隙なかりしに。思はざる外の御弔ひに

浮かび出でたる呂水の上。曇らぬ御

代の。有難さよ　不思議やなはや

更けゆく呂水の面に化したる人の見えたるは。如何なる者ぞ名を名告れ。シテ これは天鼓が亡靈なるが。御弔ひの有難さに。これまで現れ來りたり。ワキ さては天鼓が亡靈なるか。シテ や。かゝる音樂の弔ひも天鼓が手向の鼓。打ちてその聲

出づならばげにも天鼓が證あるべし。ワキ いやいや鼓を仕れ。シテ 嬉しやさては勅諚ぞと。悦ぶ月かゝやく玉殿のあたり。ワキ 玉の笛の音聲澄みて シテ 月宮の音もかくやとばかり。ワキ 天人も影向。シテ 笙篳篥もてこゝ。ワキシテ二人 天降ります氣色みて。同じく打つなり

○切返 囃子

天の鼓 上ノ詞 打ち鳴すその聲の打ち
鳴すその聲の呂水の波は滔々と
打つや打つ打つ汀の聲のより
ろく急行の手向の舞楽は有難や
シテ 面白や時もげに面白や時もげに
秋風楽なれや松の聲柳葉を拂
つて月も涼しく星も相逢ふ空

なれや烏鵲の橋のもとに紅葉
を敷き二星の館の前に風冷
やかに夜も更けて夜半楽にもはや
なりぬ人間の水は南星は北に
拱く天の海面雲の波
立ち添ふや呂水の堤の月に嘯
き水に戯れ波を穿ち袖を返す

やゝ夜遊の舞楽も時去りて五更
の一点鐘も鳴り鶏はハ聲のほの
ぼのと夜も明け白む時の鼓数
ハ六つの巷の聲よ又打ち寄り
て現か夢かまた打ち寄りて
現ハ夢幻とこそなりにけれ。

特116
702

著作權所有
不許複製

大正拾年七月廿壹日印刷
同　年七月廿五日發行

訂正著作者　廿四世　觀世元滋

發行兼印刷者　京都市上京區二條通麩屋町東北角　檜常之助

發行所　東京市神田區錦町一丁目拾番地　檜大瓜

印刷所　東京市四谷區傳馬町貳丁目　江川堂

終